西谷地（にしやち）ｂ遺跡

遺跡番号　A 352（米沢市遺跡番号）
所在地　米沢市大字川井字道下
調査次数　第 2 次
北緯・東経　37 度 55 分 27 秒・140 度 8 分 7 秒
調査委託者　国土交通省東北地方整備局山形河川国道事務所
調査原因　東北中央自動車道（米沢～米沢北間）改築事業）
調査面積　12,240 ㎡
現地調査　平成 22 年 5 月 13 日～ 11 月 30 日
調査担当者　水戸部秀樹（現場責任者）・今正幸・草野潤平・高木茜・濵田純・髙柳俊輔
調査協力　東日本高速道路株式会社東北支社山形工事事務所・米沢市教育委員会・置賜教育事務所
遺跡種別　集落跡
時代　古墳時代・奈良時代・平安時代・中世
遺構　竪穴住居跡・掘立柱建物跡・溝跡・土坑・河川跡
遺物　土師器・須恵器・青磁・石製品・金属製品・木製品　（文化財認定箱数：85 箱）

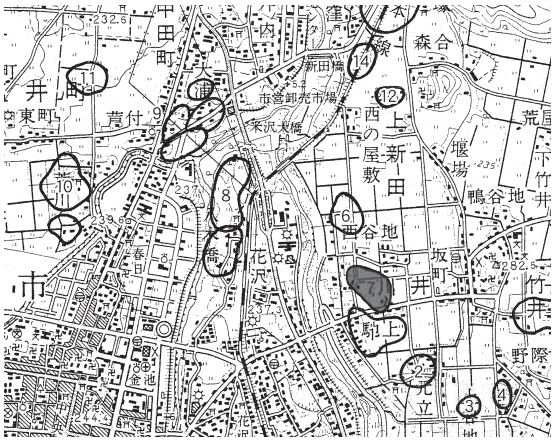

図 1　遺跡位置図（1：50,000）

調査の概要

西谷地ｂ遺跡は、最上川の支流である羽黒川右岸の後背湿地に位置（図 1）し、これまで水田として利用されていた。平成 21 年度に第 1 次調査が行われ、中世の環濠屋敷（図 5）と考えられる遺構や炭窯などが検出されている。川跡からは、古代に属する土器が出土していたため、隣接地にそれらの土器を使用した集落跡が存在することが予想されていた。

今回の第 2 次調査では、主として古墳時代、奈良時代、平安時代、中世の遺構・遺物が検出されている。遺構は調査区全面（図 5）にわたって検出され、南側に接する駒上遺跡とつながるものと想定される。遺構・遺物とも駒上遺跡と同様のものが多い。ただし、それらの密度などから考えると、古代の遺構の中心は駒上遺跡、中世の遺構の中心は西谷地ｂ遺跡に求められそうである。

古墳時代

古墳時代の遺構として確認されたものはないが、土器については調査区の中央部を北西に向かって流れていた川跡から数多く出土した。その分布は川跡（図 2）の西側を中心としており、これらの土器を使用していた集落は、調査区の西方に存在したものと考えられる。

出土した土器（図 3）には、須恵器を模倣した土師器の坏、高坏、甕、ミニチュア土器（図 4）などがある。ミニチュア土器は、須恵器模倣坏を忠実に模倣しており

図 2　川跡（南西から）

図３　古墳時代の土師器
（左：高坏 , 右：須恵器模倣坏）

図４　ミニチュア土器

注目される。いずれも６世紀に属すると考えられる。

奈良・平安時代

調査区南半部を主たる分布域として、竪穴住居跡 21 棟、掘立柱建物跡 11 棟などが検出された。竪穴住居跡には、全てカマドが付属している。土師器・須恵器（図 11）などの遺物は、カマド付近から特に多く出土した（図 8）。

焼失した竪穴住居跡 ST2584（図 6）が 1 棟検出されており、住居内からは、多量の炭化材と焼土が出土している。焼土は炭化材の上に広く覆いかぶさっており、住居の屋根が土葺きであった可能性を示している。

調査区南端部で検出された 9 世紀前半に属する竪穴住居跡 ST2827（図 7）は、周囲に「U」字状の溝をもつ。また、住居の床面を築造当初に造成した面から、後になって 20cm 程度嵩上げしている。住居外側の溝と併せて、床面付近の湿気対策を施したものと推察される。

ST2827 は、廃絶後人為的に埋め戻され、同じ場所に掘立柱建物が建てられた。埋土からは、革帯の装飾に使用した石製の巡方（図 9・10）が出土した。律令制において、役人の位階を表す遺物である。この時、遺跡の性格が、竪穴住居により構成された集落から、掘立柱建物群か

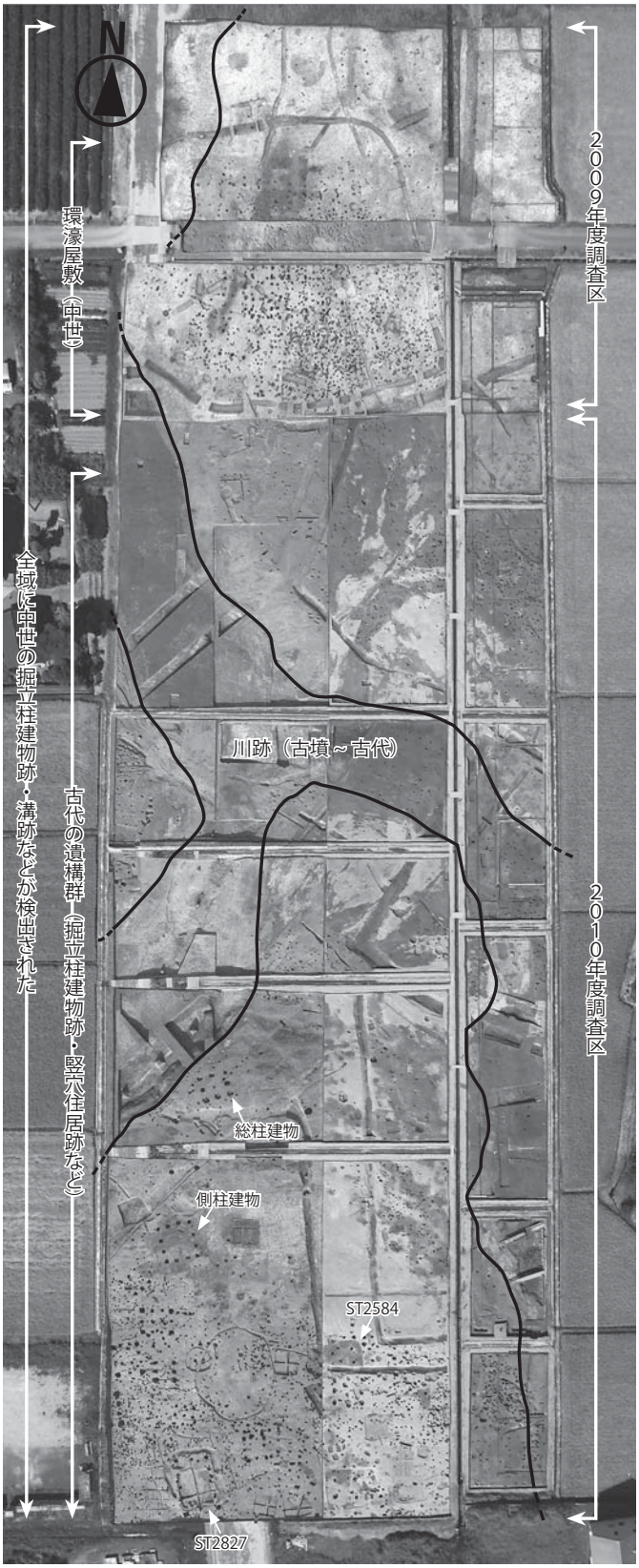

図５　調査区全景（上が北，第１・２次の調査区を合成）

図 6　焼失した竪穴住居跡 ST2584（北東から）

図 7　竪穴住居跡 ST2827 と外周の溝跡（上が南）

図 8　竪穴住居跡 ST2827 のカマドと土器（北から）

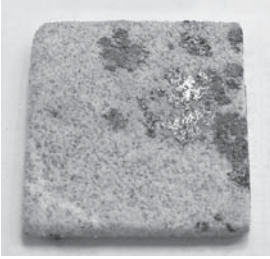

図 9　石製の巡方（表）

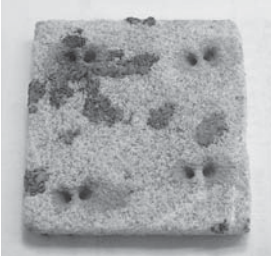

図 10　石製の巡方（裏）

図 11　奈良・平安時代の須恵器の杯類

図 12　総柱建物跡（倉庫，東から）

図 13　側柱建物跡（南東から）

図 14　溝跡（北から）

図 15　溝跡出土の木製品（上・右：下駄 , 左：漆椀）

らなる官衙関連施設へ変貌したと考えられる。

掘立柱建物跡は、11 棟を確認している。内倉庫と考えられる総柱建物跡（図 12）は 3 棟、側柱建物跡（図 13）は 8 棟である。建物の方角は、ほぼ北を向くものと、北でやや西へ振れるものとがあり、両建物群の間には時期差が存在すると考えられる。柱を立てた穴である柱穴は、ほかにも数多く見つかっており、さらに幾つかの建物が復元できそうである。

川跡からは、奈良・平安時代に属する土器も出土している。川跡内は当時の水流により、堆積土が攪拌（かくはん）されていたため、古墳時代から平安時代までの土器が、遺構内に混在している状況である。なお、中世までにこの川跡は完全に埋没したため、中世の遺構群は埋没した川跡上でも多く検出された。

中　世

第 1 次調査では、一辺約 45 mの溝跡に囲まれた屋敷跡が検出された。溝跡の幅は最大で 2.5 mである。その内側では無数の柱穴が検出され、数多くの掘立柱建物が存在していたことが判明した。屋敷内の遺構からは、主に 13 ～ 14 世紀に属する遺物が、屋敷を囲む溝跡の埋土からは、16 世紀の内耳土鍋などが出土した。

第 2 次調査でも数千基の柱穴が検出され、多数の掘立柱建物の存在が確認された。これらの柱穴は 10 条ほどの溝跡によって区切られている。溝跡は重複する場合もあり、土地の区画が幾度かやり直されたことが分かる。溝跡の中からは、やはり 16 世紀の内耳土鍋（図 16）が出土しており、この時までには埋め戻されたことが確認された。ほかに、下駄・曲物・折敷・漆椀（図 15）などの木製品、硯・茶臼なども出土した。中には伊達家の家紋が描かれた漆椀（図 17）もあり、伊達家に関連する人物が住まいした可能性が高いと言える。

16 世紀に溝が埋め戻された後の遺物・遺構は認められず、遺跡付近は田畑になったものと考えられる。その頃は伊達氏が米沢に本拠地を移した時期であり、溝を埋め立てるなどの土地の再開発が行われたのも、本拠地移転が契機となったのであろうか。

図 16　中世の土器（上段：内耳土鍋 , 下段：擂り鉢・青磁）

図 17　内面の底に伊達家の家紋が描かれた漆椀